

高校生、地域に触れて

谷口吉光（秋田県立大学）

今年7月から能代松陽高校で「持続可能な能代の『食』の消費と生産を考えるトランジション・ゼミナール」を始めました。これは、生徒たちと対話しながら進めるゼミと、地域に出かけて地域の人のお話を聞くフィールドワーク（現地実習）を組み合わせたもので、大学3年生以上でやっているゼミを高校生向けにやさしくアレンジしたものです。

毎月1～2回、授業のない土曜日の午後に希望する生徒だけが参加する、いわば「自主ゼミ」の形でやっていますが、1年から3年生までも毎回20名ほどが参加してくれ、みんなとても熱心なので教える私たちも気合いが入ります。

さて、このゼミで9月に2回のフィールドワークを行いました。1回目はネギの園芸メガ団地（能代市轟地区）、スーパーのテラタ（バイパス店）といとく（能代北店）。2回目は能代山本地区の7つの直売所を手分けして見学しました（みょうが館、ねぎっこ村、きみまち杉ちよくん、じゅんさいの館、グリーンぴあ、ドラゴンフレッシュセンター、産直ぶりこ）。

ふだんはお客として利用しているスーパーや直売所ですが、この日は「売る側」「作る側」の立場から店を見学させてもらい、担当の方のお話を通じて、売る側がどんな工夫や努力をしているかを学びました。高校生にはとても新鮮な体験だったと思います。

実際、生徒の感想を見ると、「産直コーナーに知り合いの農家の野菜があって驚いた」「直売所に意外と活気があった」「農業に魅力があることを知った」「農家の人たちの思いを感じた」「農業でも意外と稼いでいる人がいた」「地域の方がいろいろな方法でがんばっていた」「どこでも地域のものを大切にしている」など、地域の人々の取り組みや思いがストレートに高校生の心に届いていることが感じられます。

なかには「スーパーでは他店との差別化のために独自のコンセプトがあることを知った」や「消費者と生産者の意識がかけ離れない方がよい」など、大学生顔負けの鋭い指摘をした生徒もいて感心しました。

思えば、小学校では社会科見学や総合的学習などを通して子どもたちが地域に触れる機会がありますが、中学・高校と進むにつれて教科の学習や進路選択（進学や就職）などに追われ、子どもたちが地域を知らずに育っているように思います。その結果、地域を知らない、地域に無関心な若者が多くなっているのではないのでしょうか。

でも、今回わかったように、地域に触れる機会を作ってやれば、高校生は地域の課題や大人たちの努力をきちんと理解し、共感してくれると思います。高校生に地域を知ってもらう機会をもっと作ってはどうか。

（北羽新報「トランジションの風」 2017年11月10日掲載分に加筆・修正した）